

---

# Fantasy Realize

レルク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fantasy Realize

### 【Nコード】

N6906N

### 【作者名】

レルク

### 【あらすじ】

主人公レルクはレスティードは町の小さな雑貨店で働いている青年であったが、ある日いつものように業務をこなしていた時に店の倉庫で不思議な少女に出会う。それがきっかけで、レルクは大きな流れに巻き込まれてゆく事になる。

## 第一話 夢を運んできた少女（前書き）

大学の夏休みも半分を消化し、ようやく自分の時間が取れるようになってきたので、小説活動を開始したく投稿しました。未熟者ではありますが、どうか宜しくお願い致します。

## 第一話 夢を運んできた少女

Fantasy Realize

子供の頃、夢が現実になったらいいと思っていた。空飛ぶ絨毯や願い事が叶う道具、幽霊、怪物、魔法で戦うようなあの世界が現実になったら、どれほど面白いか。昔、今よりもっと子供の時、ずっと考えていた。

今の平和の退屈な世界より、あんなスリルに満ちた世界の方を望んでいた。でも、頭の片隅ではしっかり理解していた。

そんな世界なんか、ありえない

人はいつまでも子供で居続けられない。いつしか、自分も大人に近づいてゆく内にそいった事を忘れていった。他の大人達と同じ様に幻想を捨て去っていったんだ

### 第1話 夢<sup>ゆめ</sup>を運んできた少女

「おい、レルク。客足が落ち着いたら、裏の倉庫で在庫の整理を頼む」

「分かりましたー、店長」

遊んでいたばかりの頃から時間が経ち、今は町にある小さな雑貨店で働かせてもらっている。親とは離れて、今は一人暮らし。最初の間、19歳の一人暮らしは何かと大変だった。

料理をするには材料が必要だから、買う際に献立を考えたりとか洗濯は仕事へ行く前に干さないと乾かないから、朝は早起きするようにしたり。

とにかく、覚えることや今までの生活と違う部分がたくさんあり過ぎて、目を回しそうになるほどだった。今はもうすっかり慣れて、

刺激があつた新生活が退屈なものに感じる。

たまに起きられない日もあつたりするけど、毎日規則正しく生活のリズムに合わせている。いつも通りに洗濯して、朝から仕事を片付けて、帰ったら明日の準備して

変化のない日常は平和だったけれど、どこか退屈に感じていた。だけど

「裏の倉庫の在庫整理かあ… ちょっと大仕事だな、こりゃ」

裏の倉庫には日常品の売れ残りやら、家財道具の残りをしまつて置いている。そこは日がいくら過ぎようとも問題の無い品物を保管する為の倉庫として扱っていた。ある程度品物が溜まつてきたら、格安の値段で売り払う。

その為に、一度在庫の整理をしなくてはいけない。しかし

「やっぱり、日頃から意識してしまつた方がいいかな… 整理するだけでも命懸けだよ、つたく…」

普段、あまり整頓を心がけてない事もあいまつて、一つの商品を引き出そうとするだけで、上から大型のテーブルが落ちてくる事も多々ある。そんな中での整理整頓する作業が命懸けなものになるのは至極当然の事である。

「よいし… うつ、うわあああ…！」

案の定、レルクがどかそうとした商品の上から椅子やらクッションやらが落下してきた。レルクは避ける間もなく、ゴミとも言える品の山に埋もれた。

「い、いつてえ　くつそ、これじゃあ今日は残業に… ん？」

ゴミの山に埋もれたレルクがふと、倉庫の隅に目をやるとこちらを心配そうに見遣る少女がいた。髪の毛は仄かに青がかつていて、腰に届くか届かないかまでの長さだ。顔は大人びた綺麗な顔つきだが、どこか子供っぽさを残していた。

少女は少年と目が合うや否や、反対側の荷物で見えない方へと消えてしまった。

「ちよつ、ちよつと待てよ」

レルクは慌てて、消えた少女を追った。見知らぬ女の子と倉庫に一緒にいる所を店長に見られたら、何を言われるかわかったもんじやない。それに…

少女が消えた所に行くと、少女は逃げずにただこちらを見つめていた。

「な、なあ。ここで何していたんだ？」

「あなた、私が視えるの？」

こちらから質問したのにも関わらず、少女は質問で返してきた。

レルクは言い返そうと口を開けたが、見た目的に向こうが若干年上に見えた事と彼女の気の強そうな目を見て、反論を諦めて素直に答えた。

「うん、見えているけど…どういう意味だよ、それ。まさか、私は幽霊ですなんて答えるんじゃないだろうな」

「うーん、そうとも言えるかな？まっ、当たらずとも遠からずって所ね」

少女はどこかからかっているように笑って答えた。レルクとしては少女の言葉が嘘だろうがそうでないだろうが、今この場所に少女がいる、という事実の方が問題である。

「まあ、幽霊だろうがなかるうがどっちでもいいけどよ。ここに居られると商品の整理が出来ねーし、店長に見つかったらおれがどやされるから、早いとこ出ていってもらいたんだけど…ダメかな？」  
「それなら、大丈夫。ちよっと小太りのおじさんならさっきここに来たし、商品の整理だって、あたしがいた方がむしろ手助けになると思うよ」

「は？何で？」

レルクが理解出来ずに啞然とした表情している前で、少女はすぐ近くにある荷物をさも自慢げにそのまま、すうーと通り抜けてみせた。

（ ）

「ね？荷物を移動させるには邪魔にならないでしょ」

あまりの驚きに言葉を発せないレルクに少女は得意げに話す。レルクは何とか今日の前に起こった事を事実と認めると、一呼吸置いて口を開いた。

「幽霊っぽいが幽霊じゃない…じゃあ、あんたは一体」

「おいっ！レルク！！てめえ、何サボってやがんだああああ！！？」

少女が何者なのか、レルクが聞こうとしたその瞬間、後ろの倉庫の扉が開き、誰かが入って来た。いや、誰かと聞くまでもない。この轟声を発する人は近所では、唯一人“歩く雷神”こと店長の口バートンゲイツだ。子供たちの間では、ノリがいいオッサンとしても評判だが、怒らせると辺り一帯に雷を落としてゆくことの方が専ら有名であった。

「わっ！すいません、店長！片付けていたら、上からいろいろ物が落ちて来て…」

下手すれば、クビになりかねない。以前、クビになったバイトの先輩はうっかり店長の悪口である“ハゲ”を店長に聞かれてしまい、次の日にはクビになっていた。

それだけに、今この状況を如何に店長の逆鱗に触れないように説明するか、レルクの脳みそはそれだけの為にフル回転していた。

「降って来た荷物が邪魔なんで、道を作ろうとしていた所だったん

」

「ふうー、分かった、もういい。取りあえず、ここの荷物の整理が終わったら今日のお前の仕事は終わりでいい。残業になったら、残業代もツケといてやっから店出ていく時に終わった時間を書いていきやがれ」

あれこれと言いつくも聞こえるレルクの弁明を店長は静かに聞いた後、そういうや否や倉庫から出て行った。

「あ、ありがとございます！」

おう、と店長はレルクの感謝の言葉に対し振り返らずに手だけを振って答えると、店の方へと消えていった。

「はあ…殺されるかと思った…」

「それ、ちよつと大げさじゃない？いくら何でも死にやしないですよ」

「あの人の場合は、冗談じゃ済まない時があるから、怖いんだよ…」  
嵐が通り過ぎた後、緊張が解けて溜め息吐くレルクに少女が茶化す様に言うと、レルクは項垂れたまま首を横に振って答えた。そうして、一息置いた後に改めて少女の方を向き、顔の前に両手を合わせると、

「じゃ、悪いんだけど倉庫整理を手伝ってもらえる？」

倉庫の中を片付ける間、レルクは彼女から事情を聞いた。レルクがいる実体ある世界を“現実世界”と言うなら、彼女は“夢世界”と言つべき世界からこの現実世界に流れ込んで来てしまったらしい。

“夢世界”とは、現実世界に生きる人々や動物、さらには植物などの生きとし生ける者全ての夢、つまり、想像力で出来ている世界の事らしい。その世界では、現実ではありえない事も平然と起こるらしい。例えば、背中に翼を生やして空を自由に飛びたいと願う子供の想像力が、夢世界でその事象を現実にしてしまえる。

要するに、現実側の願いが実現される世界、という事らしい。また、その世界に住む住人は現実世界の魂そのもの、という事だ。

「へえ、じゃあおれが眠っている間に視る夢ってのは…」

「その通り、あなたが視ている夢世界ってわけ」

レルクの倉庫の片付けを眺めながら、彼女はそう言った。話しからすれば、彼女はこの世界に置いては実体の無い幽体(?)なので、彼女が腰かけているようにレルクからは見えるが、当然そのように浮いているという事なのだろう。

「あのさ、一つ納得出来ない部分があるんだけど？」

「なに？」

「現実世界から夢世界には干渉出来ないのに、何でアンタのように

夢世界から現実世界に干渉する事は出来るんだ？」

「それは　ごめん、あたしにもよく分からないんだ　」

レルクの質問を聞くと、彼女は俯き沈んだ声で答えた。レルク自身、ほんの些細な興味で聞いただけだったので、気を落とした彼女を視てどことなく気まづくなつた。

「ああ、別にいいんだ。分からないなら、分からないで…ちよつと気になつただけだから、はは…さあ、片付け、片付けっ！」

あれ？」

先ほどから感じていた違和感　自分が思っている以上に片付けのペースが速いように感じていた。勘違いかと思っていたが、気まづさを紛らそうと最後に残つた部分を片付けようと思つたら、もう終わっていた。

レルクが驚いたように彼女の方を振り向くと、彼女は少し照れるような仕草を見せ、

「何だか大変そうだったから、こつやつて手伝つてあげたの」

そうとうと彼女は傍にあつた小さな椅子に手をかざし、何か念じるような表情をしたかと思うと、椅子がひとりでに動き出して空中に浮いた。

「　　っ!？」

「念動力つて言うんだっけ？それともサイコキネシスだっけ？取りあえず私のように夢世界の住人は、小さな物ならこつやつて簡単に動かせるみたいね」

彼女が手を振ると椅子は元あつた場所へとひとりでに戻つて行った。今更、何があつても驚くつもりはなかったレルクだったが、にわかには信じられない事だった。

「はあ、　夢世界つて、便利なんだな　」

「…そうとも、限らないけどね…」

「えっ!？」

ぼそつと彼女が呟いた言葉をレルクが思わず聞き返すと、彼女は何でもないと首を振つた。さらに彼女の話しによれば、現実世界に

いたとされる幻獣や幽霊などは自分のように誤って現実世界に来てしまった夢世界の住人らしい。

しかし、本来夢世界の産物である幻獣や幽霊が現実側に出てくる事は現実、夢の両方

の世界に不都合をもたらず事が多々あるらしい。

その為、彼女はなるべく現実世界には干渉しない為にも人目を避けてこの倉庫に隠れていたという事だ。

「だから、もう少しの間だけここに居させてくれない？」

「まあ、そう言った事情なら仕方ないな。好きなだけ居てもいいんじゃないか。店長には見えねえし、手伝ってもらってこっちは助かったし」

「…！ありがとうっ！」

レルクがそう言うのと彼女は安心したように笑顔を見せて答えた。

こっちとしては特に何も手助けしたつもりはなかったので、レルクは何となく恥ずかしくなった。

「いや、いいよ。じゃあ、おれはそろそろ出て行くから…あつ、そうだ！おれの名前はレルク！レスティード。レルクって呼んでくれよ」

「レルク…いい名前ね。私はルナ！セスティア。ルナでいいよ」

「ルナ…か。じゃあ、夢の世界で会えたらいいな。ちょっと変だけども、おやすみ！」

レルクはそう言っただけで倉庫を出て行った。その姿を目で追いながら、ルナはどこか寂しげに呟いた。

「同じ夢世界で会えたらいいね…」

## 第一話 夢を運んできた少女（後書き）

いかがでしたでしょうか？未熟者故に、まだまだ至らぬ部分が多々あるとは思いますが、もし宜しければFantasy Realizeの応援を宜しくお願いします。次回作ですが、一週間程で投稿したいと思っています。次回作をお読みになりたいと考えていらっしゃる方がいたら、ぜひ参考にして下さい。

## 第二話 来訪する、異形の生き物達（前書き）

二話投稿するのが遅れてすいません  
大学始まった途端、やはりペンが進みませんね、ほんと  
でも、これから割と進むかと思えます  
ちよくちよく、読んでみてください

## 第二話 来訪する、異形の生き物達

### 第二話 来訪する、異形の生き物達

その日、不思議な夢を視た。ルナの話しを聞いたから、なんだろうか。

とても綺麗な草原に一人立っていた。上には澄みきった青空、スカイブルーしたには風の跡が目に見えるような鮮やかな草原、奥の方には地平線まで続く花畑が広がっていた。ふと目に小さな影が映った。何か悪意が固まったような小さな一つの闇から、影が止めどもなく溢れ出てきて、自分の目の前に広がる壮大な景色を覆ってゆく。

闇は留まることを知らず、自分の周り一帯を闇に変えてしまった。見渡せども、見渡せども広がるは暗黒。上か下か、左右の区別がつかなくなったと思ったら、突如目の前に赤く光る道化のような笑みが現れた。その巨大な顔に喰われるか、喰われないかという時、意識が消えた

「はっ！！？」

悪夢にうなされて起きてみると、なんて事はない。至って普通の自室である。いつもと変わらぬ景色を見て、レルクは安堵した溜め息を漏らすと、再びベッドの上に倒れた。

（昨日、話しを聞いたからかな…変な夢、見ちまったな）

普段と変わらず、顔を洗い、衣服を着替え、ほぼ毎日同じ朝食を摂り、歯を磨き、寝癖ではねている銀髪を整え、仕事に行く身支度を済ませる。昨日は普段の日常とは異なる出来事が起きたが、だからと言って今日の生活が変わる訳じゃない。

確かに昨日の事が頭に引っかかっているが、一人暮らししているレルクとしてはそればかり気にしていられない。今日は今日の事を考えて行かなきゃならない。

（…まだ、あの女の子まだ倉庫にいるのかな…）

しかし、どうにも頭から彼女の事が離れない。何故だかは自分でも分からないが、どうしても彼女の事が気になるのである。

(まっ、行ってみれば分かるだろうしな…)

仕事に行く身支度をしながら考えていたレルクだが、ふと外がやけに騒がしい事に気が付く。普段なら、この時間帯はまだ寝ている者が多く、静かなものなのだが、今日に限って何やら騒がしい物音が聞こえてくる。

(一体、何なんだ?)

外に出ようと、レルクが扉の取っ手に手を伸ばした時

銃声が二発

比較的に治安がいいこの町で発砲など、まずあり得ない。それだけにレルクは血相を変えて、勢いよく扉を開けると、そこには異様な光景が広がっていた。

町の住人達が逃げる方向と逆の方見ると、町の警官達が何か銃を向けている。しかし、警官達は怯えているようなへっぴり腰で後退りしている。何に怯えているのかと、警官達の視線の方へと見やると

見た事も無い生き物達がいた。体は何やら半液状の物質で出来ており、這いずるように動いている。一見、ただの水のようにも見えなくもないが、形を変えたりするのを見れば、おそらく生き物である事には違いないだろう。

「くっ！銃が効かねえぞ！どうなってんだ!？」

警官達が半液の生物達に発砲しかけているが、空しくも銃弾は謎の生物の体をただ突き抜けるだけだ。

(何だ、あいつらは!?!まるで、スライムみたいだ…)

レルクは最初、半液状の生き物達を無害のように感じていたが、奴らが通り過ぎた跡を見て、その考えを改めた。

スライム達を通った所全て、涸れ果てていた。石が敷かれた通りも水分を残らず抜き取られ砂と化し、周りの植物は萎れて枯れている。

しかも、スライム達は周りから吸い取った水分でさらに肥大し、ある大きさになると分裂して増殖している。レルクの目に、家一軒が音を立って崩れる様子が映った。

(やばい！このままじゃ…)

この調子なら、一日と持たずこの町全体を廃墟と化すだろう。一刻も早く、この生き物達を駆除しなければ、事態はますます深刻なものになる。

何とかしないと

必死で考えているレルクの目に、壊れてゆく町の光景が映った。

崩壊しかかった家から火が出た途端、スライム達はその家から離れてゆく。

(もしかして！)

レルクはふと何思いついたのか、周りの家々に無断で入り込み、中から何かを抱えて出て来ると、警官隊の方へと走っていった。

「おいっ！レルクッ！何をやっている！？早く非難しな…」

「メシル警部補、ちょっと聞いてくれ！銃が効かないなら…」

レルクはメシル警部補に何やら話すと、メシル警部補は驚いた顔をしてレルクを見返した。レルクは警部補の視線を真っ直ぐに受け止め、無言で頷いた。

「本気なんだな…もし、うまくいかなかったら…」

「しなくても同じ事さ。このまま奴らに飲み込まれて、町は消えてしまっよ…だったら、あいつらにひと泡吹かせてやるっぜ！」

「そう…だな！よし、他の奴にも協力するように伝えてくるぜ！」

これからやろうとしている事に緊張が隠し切れない警部補に、レルクは笑って励ます。こんな事態に笑うなんて不謹慎かもしれないが、笑顔は何より人を安心させる。

事実、レルクの笑顔を見て気落ちしたのか余計な緊張が解れ、警部補は恐怖と混乱によって失っていた平静さを取り戻すと、レルクの作戦を他の警官達に伝えるに走って行った。

(よしっ！後は、うまくいくかどうか…！)

緊張した面持ちでレルクは増殖を続ける異形の生物を見据えた。スライム達は未だに増殖を続け、もはや家一軒を楽に飲み込める程まで数を増加させている。町全て飲み込むまで、そう時間はかからないだろう。もはや、一刻の猶予も許されない。

今から行う作戦が効かなければ、町を捨てて逃げるしかない。よしんば効いたとしても、作戦が少しでも遅れてしまったら町の復興は二度と叶わなくなるだろう。

(今から人間の武器って奴を見せてやる！覚悟しとけよ！！)

警官達が所定の配備に着き、作戦の準備が整った。町の人々は町から離れた場所で見守っている。警官達の間には緊張が走る

「レルク。準備が整ったみたいだ…作戦開始の合図は、お前に任せろ」

「ああ、分かった…」

魔物 スライム達の真正面に位置を取ったのは警部補と警官数人、そしてレルク。警部補から作戦の合図を任されたレルクは、重々しく頷き、息を呑んだ。

「…作戦開始っ！！！」

レルクの大声による合図と共に、それぞれ所定のポイントに着いた警官達とレルクは、一斉にすぐ下に松明を落とした。たつぷりと円上に撒かれた灯油の上に

松明に灯っていた火は瞬く間に灯油に移り、火は魔物を焼き尽くす業火となつて、灯油で描かれた円を焰で埋め尽くした。

スライム達はちょうど円の中心に当たる位置で、かつ材木屋、家財道具店、公園と言った火の働きを助ける店や施設が多い部分でもある。

銃が効かないなら火攻めはどうだろうか、というのがレルク以案だった。当然最初は皆、反対していたがスライム達の増殖の速さと奴らによる被害、レルクの言葉で考えを改めたのである。

(効いてくれ…！効いてくれ…！もし、これがダメだったら…！！)

この火攻めが通用しなかった場合、町はこの火で決定的なダメージを負う事になるだろう。この考えを出したのは自分だ、いざという時に責任がとるのは自分なんだ。

レルクは周りの人々とは比べ物にならない程の重圧プレッシャーを抱え、事の成り行きを見守る。業火に包まれゆく、魔物達の様子を。

突如、変化が起きた。火が回って半刻。何も効果がないようにも思えたスライム達の動きが突然、止まった。目の前の業火から逃げるように、魔物達は炎上網の中心へと集まってゆく。

その様子を見ていた町の人達から歓声の音が漏れ始める。持ち得るあらゆる手段が全く効かなかった不気味な生物達に対し、やつと希望が見え始めたからである。

「やったな！レルク！やつこさん、正に尻に火が付いて逃げたらあ！はは！あいつらが火に弱いつてよく気が付いたなあ！」

「痛いですつて、痛いって…！ははは…」

メシル警部補もレルクの首に腕を回して、喜びを露わにしている。周りの警官達も肩に腕を組んだり、互いに手を叩き合っている。警部補は褒めていたが、奴らが火に弱いという事実はレルク自身、確証が持てなかった。

スライム達が炎上している家々から逃げるように避けている場面がレルクの眼に映らなかったなら、レルクもとてもじゃないが言いだせなかっただろう。

しかし

「お、おいつ！？何か、様子が変だぞ！」

警官隊の内の一人が突然、声を上げて指差した方をみんなが見ると、スライム達が無理矢理一つの場所に集まろうとしている。明らかに、不自然な動きだ。

「な、何をやるうつてん…だ？」

誰もその問いに答えられなかった。ただ、ただ目の前で起きている事の傍観していることしか出来なかった。

（ …？ 数が、減っている…？ ）

スライム達に変化が起きた。数え切れぬ程の数にまで増えていた個体がいつの間にか、数えられる程までに減ってきている。しかし、個体の大きさは減っていった数の分だけ大きく肥大しているように感じとれた。

「これって…まさか…合体、しているのか？」

警部補の言葉が合図になったかのように、スライム達は沸騰しているかのように急激に膨張を始めた。体積が急速に増大し始め、やがて意識的になのか無意識的になのかスライムの巨大な一個体は、形を下半身のない巨人へと近づけていった。

「こ、こんな奴と…どう、戦えば…」

町に張った炎上網もこの大きさのスライム相手では虚しくも意味をなさないようだ。巨人となったスライムは炎がある事を意に介さず、あまりにも巨大な手を眼前の警官隊とレルクに振り降ろそうとした。

(もうダメだっ!!)

迫力気圧され、思わずレルクは目を閉じて降りかかる死を待った

( )

が、いくら待っても何の痛痒も衝撃も襲って来なかった。何が起こったのか、薄目を静かに開けた。

いつの間にか、レルクの正面に黒い長髪の男性が立っていた。見慣れない衣服を纏っており、立ち振る舞いも只者ならざる雰囲気も放っている。

その男性の更に向こう側の巨人スライム《ジャイアントスライム》は何やら苦悶している。よくよく見ると、人間で言う所の右の二の腕辺りから、残りが消え失せていた。どうやら、目の前の男性が消し飛ばしたらしい。

「やれやれ…とんだ仕事を引き受けちまったな…」

煙草を吸いながら男性は独り言を呟いた。改めて見ると、異様な部分が所々見受けられる。装飾された両刃の剣を腰に下げている、衣服に使われている素材も銀色に光る何かの動物の体毛が使われて

いたりど、どこか現実感に乏しく感じる。

(もしかして…夢世界の…?)

周りを見てみると、何が起きたのかさっぱり分からないと言った様子で警官達とメシル警部補は辺りをきよろきよろと見渡している。どうやら、男性が目には映らないようだ。

「面倒だが、やるしかないな…」

異界の住人らしき男性は煙草を放ると、指先から火を放ち吸殻は灰と化した。男性は屈み込むと、巨人スライムに向かって突っ込んで行っただ。

巨人スライムも苦悶にのたうち回ってばかりではなく、残された腕で突如自分の腕を消し飛ばした敵を薙ぎ払おうと、振りかぶった。「まったく…おとなしく夢世界で生きてりゃ、長い生きできたかな」

男性は剣を抜かずに真っ向から巨人スライムに突っ込んで行っただ。

(いくら何でも無茶だっ!!!)

男性は思いつき踏み込んで、巨人スライムに飛び込んで行く。

男性はまだ剣を抜かない。巨人スライムの腕が男性に迫った

閃光一瞬

巨人スライムの手が男性を潰しそうになった瞬間、今度は肩までスライムの腕が消え去った。地面に降り立った男性の手には既に剣が握られていて、レルクには男性がいつ抜刀したのか全く分からなかった。

(強い…!)

巨人スライムが怯んでいる隙に、男性は新たな構えを取っていた。眼を閉じて、息を静かに吸い込み、気迫を高めてゆく。その尋常ならざる気配に、レルクは息を飲む。

男性が集中を高めている間に、巨人スライムは倒れかかる体勢で男性に襲いかかった。

しかし

「黒き竜の爪に引き裂かれてゆけ

黒竜滅塵爪!!!」

男性は水平に構えていた剣を何か黒い霊気のような物が包み込むと、巨人スライムに向かって一気に振り抜いた。すると、剣から黒い霊気が放たれた。

黒い霊気は剣の描いた軌跡のまま、巨人スライムへと飛んでいき巨体を真っ二つにした。切傷は黒く染まり、眼を凝らしてみると傷口から瞬く間にスライムの体が黒い塵と化し、消滅してゆくのが伺える。

そして、完全にスライムは消え去った。

すぐさま、後ろの方へと離れていた町の人々から歓声の聲が沸く。正体不明の恐怖から解放され、再び安堵した様子で。警官達も疲れた様にその場に座り込んだが、誰もが顔にほっとした表情を浮かべている。

「あ、あの…あっ」

レルクは突然現れた男性に礼を述べようと歩み寄ったが、男性は振り向きもせずスライムの消滅を確認した途端、どこかへと足早に向かっていってしまった。

（一体、どこへ　っ!?!）

レルクは男性が向かった場所を直感した。

（ルナの所だっ!）

レルクは急いで男性の跡を追った。そして、店の倉庫の前に着くと

「…状況は切迫している。まだ、進行は進んでいないが魔物が現実に出るようになっては、その内必ず歪みが生じる事になるだろうな…」

「その事態は覚悟していたでしょ。それより、この宝珠を護る事が何よりの優先事項よ。これさえ、アイツの手に渡らなければ…」

どうやら、ルナと男性は顔見知りだったらしい。お互い、何か深刻な様子で話している。話しの内容はさっぱりだが、ふとルナが取り出した宝珠にレルクは目を奪われた。

完璧な球体のそれは、虹色の輝きを灯し、周囲には光が遊んでい

るかのように飛んでいる。表現しようの無い程、幻想的で綺麗な物だった。

「……そこにいる奴、おとなしく出てこい！」

レルクがその宝珠に見惚れていると、男性はレルクの気配を察知し、剣を身構えた。

彼の实力を知っているレルクはおとなしく、男性とルナの前に出た。

「ほっ……なあんだ、レルクだったのね……」

「おいルナ、こいつは何者だ？」

ルナが警戒を解いたにも関わらず、男性は少しも構えを崩さない。見知らぬ者は敵、と決めつけているかのようにだった。ルナは事情を知らない彼に、今までの経緯を伝えた。

「そうだったのか……いや、剣を向けてすまなかった。俺はベルク＝セイド、よろしくな」

ルナから話を聞くと、すぐに態度を改めて握手を求めてきた。間近で見ると、随分若々しい雰囲気青年だ。立ち振る舞いなどから見ても明らかに、自分よりも年上だと感じさせるのに顔は精悍で逞しく、若々しいはつらつさがある。

「こ、こちらこそよろしくお願いしますっ」

「さて、これからどうする？ベルン」

緊張して声が上がってしまったレルクを横目で見ながら、ルナはベルクにこれからの方針を訪ねた。ベルクの方もレルクと会釈を交わした後、うなるように思索を張り巡らしていた。

（まさか……いや、あり得るか……？……仮に、そうだとするならば……）

「レルク……だったな。さっき、お前は宝珠を見たか？」

ベルンは思考をまとめると、おもむろに顔を上げるとレルクに向き合い、真剣な眼差しで聞いてきた。

「え？ええ……あの虹色に光っていた綺麗な球石の事ですよ？ちらつと、見ました」

「そうか、なら話しは早い。それを見てしまった以上、お前も当事

者だ。これから、おれ達に同行してもらおう…さもなければ　　わかるな？」

「ちよつと、ベルン!？」

レルクの返答に対しベルンは重い声でそう言うなり、脅すかのようには腰の佩剣に手を伸ばした。ルナはベルンの突然の行動に戸惑いが隠せない。

ふざけじゃない雰囲気気圧され、レルクはごくりと唾を飲み込んだ。

(これは…本気だ)

「…わかった。付いて行くよ。どこに行けばいい？」

「レルク!? 本気なの？」

ルナの言葉をレルクは無言のまま手で制した。眼は変わらず、ベルンを見つめあつたまま。

「物分かりが良くて助かるぜ。まず、夢世界へと行かなきゃならねえから、この辺で夢世界とリンクしているポイントに向かう。場所はこつちの世界でいうと…カルベロ聖堂だ」

「カルベロ聖堂か、この町からならそうは遠くないか」

レルクは自分でもどうかしていると思うほど、冷静だった。いきなり、現れた異世界の住人と共に旅に出る事になったのにも関わらず、前々から決まっていたかのように受け入れている自分がいる。

何故かはわからない。でも、魂はそう感じている。

「出発は明日の明朝だ。今夜中に支度を整えておいてくれ」

(何でだろう…こうする事が何か自然に思えた…)

驚き果てるルナと相変わらず何か考え事しているベルンと別れ、自宅へと帰る途中、レルクはこれからの事、何故あの申し出を受け入れたのか考えていた。

(ちよつと溜まった金でどこか行きたいとこだったしな、まっいいか)

レルクは歩いていった。大きな分岐を過ぎて、選んだ道を。後戻りの出来ないの道を、レルクは歩いて行く



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6906n/>

---

F a n t a s y   R e a l i z e

2010年11月6日22時13分発行